

草のみどり

Kusa no Midori

2021.

11

Special feature

秋卒業式

FRONT LINE 理工学部

巻末特集

オンラインキャンパスライフ体験会

中央大学



国際経営学部



Vol.10

FACULTY OF GLOBAL MANAGEMENT

コロナ禍「だからこそ」 できること

国際経営学部国際経営学科2年
私立成蹊高等学校（東京都）出身

あきま りゅうのすけ
秋間 龍之介

高校時代の留学経験と 更なる意欲の芽生え

私は高校2年次に母校の交換留学生として1年間、豪州に派遣された。その際の最大の学びは、異文化体験の意義を痛感したことである。このプログラム自体、文化的背景が複雑に絡む「カウラ捕虜脱獄事件」に由来しており、両国の文化的相互理解促進という目的があったのだが、留学を通してさまざまな人と出会う中で自分の価値観が形成されたこともあり、その重要性を再確認した。

このことがきっかけで大学入学前から「もっと多くの人に異文化体験を通じて自分を探してほしい」、また「自分自身、再び似た体験がしたい」と感じるようになった。これが、国際経営学部に入學してから私の大学生活の軸となる考え方となっている。なお、ここでの「異文化体験」は国際交流や異文化交流に限定せず、自分とは

異なる人々や文化に触れることで自分自身を見つめ直したり、その文化に適応しようとしたりする体験のことである。

高まった「だからこそ」精神

そんな思いをもって迎えた大学生活1年目の2020年は、例年とは異なる性格を呈した。予定されていた必修の短期留学は「オンライン研修」となり、海外への派遣は中止を余儀なくされ、学部の特徴の一つであるはずのさまざまな国からの留学生や教員と学ぶ機会も、日本への入国が難しくなったことや対面形式での授業が実施しづらくなったことなどが影響し十分に享受できなかった。緊急事態宣言が一時的に解除された際には、いくつかの授業は対面とオンラインを併用して実施されたものの、留学生をはじめ対面授業に参加できない学生はほかの学生とつながりにくいという環境が生まれていた。

しかし、私はコロナ禍「だから」仕方

ないと考えるのをやめ、コロナ禍「だからこそ」できることがあると捉えた。確かに「国際」と名の付く我々の学部にとって異文化体験がしづらくなることは「脅威」であるが、同時に「機会」でもあるのだ。留学がしづらい時期「だからこそ」、改めて異文化体験の意義を再確認し、学部全体の異文化体験に対する興味関心を高める必要があると捉え、その楽しさや重要性を広め、留学生と留学をめざす学生を支援する学生団体の設立を決意した。

留学経験シェア団体の設立と 運営を通じて

私は、そのような目的を果たすため、今年3月にG-ACEという学生団体を設立した。G-ACEはGlomac Agency of Cultural Experienceの略で、異文化体験の魅力や意義を学生に伝え、留学や海外でのキャリアをめざす学生を支援することを主な目的としている。

具体的には、YouTubeで異文化体験の楽しさを伝え、興味を持ってもらうきっかけを作り、SNSで留学に必要な情報やさまざまな語学の情報を発信し、留学相談室で留学プログラム応募のための支援などを行っている。ほかにも、定期的にイベントを通じて学部内の交流を促し、異文化体験の面白さを発信している。

創業者兼リーダーとなった私は、15名を超えるAgents（メンバー）を率いて、さまざまな企画やその運営を行っていた。互いを下の名前と呼び合うことを推奨し、協力し合える雰囲気作りをしたり、自分に批判的な意見を言えるAgentsをChiefアンチ幹部



G-ACEは国際経営学部を中心に活動している学生団体です。留学、語学、海外キャリアなどを、SNSやイベントを通じてシェアすることで、異文化体験に興味をもってもらう、というコンセプトのもと活動しています





G-ACEイベントで次期リーダーと筆者

的役割をさせたりしたが、最も気をつけていたことは、学生に対し「楽しさを伝える」立場と「相談に乗り、支援する」立場を両立し、組織として教職員の方々からも信頼されることだった。とはいえ、信頼される組織になろうとするばかりに、いわゆるカタブツになったのでは楽しさを十分に伝えられない。このようにさまざまな活動の運営をしながらあるべき姿を模索する日々が続いたが、私自身の留学内定が決まると状況は一変した。

自身と団体の今後

団体の運営に奔走しながらも、私は幸運にも2021年度長期留学秋派遣で内定をいただくことができた。今年7月ごろにワクチン接種が完了したこともあり、「例外的措置」としての派遣が認められた。

留学先はアメリカにあるカリフォルニア大学デビス校で、1年を通じて関心のある経済学、特に貿易関連について学修するつもりである。私自身、再びこうして留学の機会をいただけたことを非常にうれしく思っている。また、留学中に達成したい目標の一つとして、留学先近くのシリコン

バレーに位置するAmazonや、日本を代表する企業であるRakutenなどの比較・分析を通じて、日米のeコマース市場の違いについて研究したいと考えている。

派遣が認められ、自分の留学準備に追われるようになった時期、国外にしながらG-ACEのリーダーを務めるのは難しいと判断した私は、引き継ぎ作業にも取り組みかけた。

創設時より献身的にサポートしてくれた同期を次期リーダーに任命し、引き継ぎやすいような体制づくりやビジョンの明確化などを徹底して行った。G-ACEとしての今後の活動は次期リーダーに一任したものの、私から提案した新たな企画もいくつか動き出している。特に、各国に派遣される学部生5、6人のチームがそれぞれの留学先での生活に関する動画を提供し、TikTokやYouTubeにて短編動画として公開するG-ACE Ambassadors Projectは、「異文化体験の楽しさや重要さ」を学内外にダイレクトに届けることができる取り組みだと考えており、私個人としても注力していきたい。



留学先のUCDavisにて

国際経営学部だより

国際経営学部における経済学教育

国際経営学部教授 たかはし いちろう 高橋 一郎

昨年度はコロナ禍におけるチャレンジの1年であった。教員にとっても講義スライド作成、オンライン授業や試験への対応など、相当な準備時間が必要であった。それ以上に学生生活のストレスは大きかったと思う。学生同士の交流も阻害され、孤立した中で膨大な課題をこなさなければならなかった。今年もまだ困難が続いている。1日も早い収束を祈るばかりである。

グローバル経済社会を担うリーダーを輩出するのが国際経営学部の使命である。現在、企業をとりまく環境は激変している。経済の二極化が進み、地球環境の持続可能性すら脅かされている。異常気象が世界各地を襲い、年間4万種以上の生物と1万平方キロメートルにも及ぶ熱帯雨林がこの惑星から姿を消しつつあるという。これからの企業経営は、ますます多様な生物との共存が求められるだろう。

私たち経済関連科目の担当者は、「行動する知性」に相応しい経済学教育を提供することをモットーとしている。とりわけ「経済学入門」と「ミクロ経済学」の2科目は必修科目ということもあり力を入れている。欧米の博士号取得者がグローバル・スタンダードな教科書を用いて、ミクロ経済学・マクロ経済学を通して論理的思考能力とともに、英語力の涵養もめざしている（ただし、再履修科目は日本語で行っている）。コースウェアとしてはmanabaに加えMindTapを用いている。両方の課題をこなすには大量の英文を読まなければならない。学生さんに聞くと、大変だが英語の力がついていることを実感しているという。実際、成績はおしなべて良く、質問のメールも丁寧で、気持ちの良い学生さんばかりである。ご家庭の教育力の高さがうかがわれる。混沌とした時代の未来を切り拓くのは真に自律した能動的な叡智の人にほかならない。そのような若き知性を育てていることが私たち教員の誇りであり、また楽しみである。

